

## 〔臨床実験〕

## 〔特別掲載〕

(東女医大誌第30巻第5号)  
(頁1036—1038昭和35年5月)

## 陰囊に発生せる毳毛部黄癬の一例

東京女子医科大学皮膚科学教室

教授	中	村	敏	郎
	ナカ	ムラ	トシ	オ
講師	大	塚	末	野
	オオ	ツカ	スエ	ノ

(受付 昭和 35 年 4 月 8 日)

## 緒 言

毳毛部皮膚に発生する黄癬に関しては、今日までその報告が少なく、昭和27年までに岡村<sup>1)</sup>、井上<sup>2)</sup>、青木<sup>3)</sup>、加藤<sup>4)</sup>、高橋・竹之内<sup>5)</sup>、尾山<sup>6)</sup>らの27例を数えるのみである。このうち岡村<sup>1)</sup>、尾山<sup>6)</sup>の2例を除いてはすべて頭部黄癬に合併せるものであり、尾山<sup>6)</sup>の症例も秕糠疹様落屑性紅斑を呈し、菌甲を認めず、臨床的所見は必ずしも黄癬とはいいい難いのである。

また、毳毛部黄癬の発生部位は多くは顔面、四肢などの露出部であるが、著者らは陰囊皮膚に定型的な毳毛部黄癬を発生せる一例を経験し、さきに日本皮膚科学会東京地方会第314回例会において報告したが、ここにその概要を記載するものである。

## 症 例

患者；鈴○輝○ 24 才 男子 農業

現住所 千葉県東葛飾郡江戸川町

(但し 初診時は東京都新宿区、東京女子医科大学病院整形外科入院中)

初診； 昭和26年9月11日

主訴； 陰囊皮膚の灰白色痂皮様発疹

既往歴； 昭和26年5月5日、オート三輪車より転落し、両側大腿骨折にて本院整形外科に入院臥床中である。

8月中旬より陰囊皮膚に軽度の瘙痒を感じたが、放置したまま約1カ月経過した。その間主訴のごとき発疹は全く認めないという。

9月8日、突然として陰囊皮膚に灰白色の痂皮様発疹を多発し、整形外科の依頼により当

科を訪れたものである。

昭和20年頃長野県に旅行せるほかは、外地はもとより内地旅行をしたこともなく、外地よりの旅行者との交際も否定している。

家畜との関係は、患者が入院当時より発病直後まで飼育していた猫(捨て猫であるという)の四肢の先端が全部脱毛し軽度の鱗屑を認めた。この猫はその後間もなく失踪して追求不能である。

なお患者は発疹の出現する数日前より隔日に入浴を始めたが、看護婦の助力によるため、入浴後十分に清拭できなかったと訴えている。

現症； 陰囊皮膚の、ほとんど全体に帽針頭大から扁豆大の、灰白色円形の痂皮が相接して無数に認められる。痂皮はいずれも比較的菲薄で、中央部はやや陥凹し皿状を呈して、いわゆる黄癬菌甲様の状態を示している。この菌甲は皮膚に固着し、強いて剝離しようすると疼痛を訴え、剝離面はやや湿潤し発赤を認める。深部への浸潤は全く認めない。またこの部分には鼠尿のごとき異臭があり、患者自身もかびくさい、いやなおいがするといっている。瘙痒はほとんどない。

経過； 無処置のまま翌日再診すると、局所症状は僅か一日で軽快し、菌甲は前日の約半数以下に減少した。少量のチンク油のみを与えて経過を見ると13日にはすでに菌甲は全く消失し鱗

屑すら認めず、ただ軽度の発赤を見るのみであつた。

顕微鏡所見：菌甲らしき痂皮を鏡検すると、無数の菌糸と分節芽胞を認め、全く菌糸より形成されている感がある。よつて臨床所見より併せて考え、これを黄癬菌甲と診断したのである。

培養： サブロー氏ブドウ糖寒天に斜面、室温培養すると、発育は非常に早く、培養第3日には白色または黄色の直径2mmの菌苔を認めさらに粉をまいたような外観を呈した。

培養第20日目には、中心部がやや膨隆あるいは陥没せる、直径2cm大の絨毛ある白色放線状皺襞を発生した。

菌学的所見： 著明なのは、多数の紡錘状芽胞であり、これは比較的太く、一般に二重の壁を有し、隔壁によつて数個の房室に分れている。

菌糸は有節で分岐し、少数のラケット様菌糸、単純性外生芽胞、結節状器官を認めた。厚膜胞子、シャンデリヤ状菌糸、櫛状器官は全く認めない。

動物接種試験： 二頭のモルモットに型のごとく接種したが、一頭は成功せず、他の一頭では接種部の鱗屑形成と脱毛を認め得た。毛髪への侵入はこれを認めなかつた。

菌種決定： 以上の顕微鏡所見、培養の形態、菌学的所見、動物接種試験などの結果から、われわれはこれを *Achorion gypseum* と認めた。

### 考 按

一般に、皮膚に菌甲を形成する真菌性疾患を、その臨床的所見により黄癬と称するが、本症は地理的關係を有し、東欧、日本（とくに北陸地方）、支那などにしばしば見られるのである。元来黄癬は有髪頭部に発生することが多く、かつ特有なる症状を呈するものであるが、毳毛部皮膚に同様の臨床症状を認める場合に、これを毳毛部黄癬と称し比較的稀に見られる疾患とされているのである。かかる部位的關係は原因菌の種類によるともいわれており、頭部黄癬からは人体寄生性の *Achorion Schönlein* のみを発見するが、毳毛部黄癬の場合は、ほとんど常に動物寄生性の *Achorion gypseum* あるいは *Achorion Quinckeanum* 等を検出するものである。

歐洲では毳毛部黄癬がしばしば存在し、その多くは鼠の黄癬の原因菌である *Achorion Quinckeanum* によると記載されている。本邦においては、本症の報告がときに見られるが、原因菌は *Achorion Schönlein* 及び *Achorion gypseum* であり、僅かに井上<sup>2)</sup>が、富山県で経験した一例のみが、*Achorion Quinckeanum* を証明したというが、菌学的検索の詳細が不明であり確認し得ないのである。

これよりさき岡村<sup>3)</sup>は、明治40年10月の日本皮膚科学会第27通常会において、「陰囊皮膚における黄癬の一例」と題する報告を行つているが、これは本邦における毳毛部黄癬の最初の、しかも発生部位の稀有な例の報告である。患者は28才の支那人で、2週間前支那を出発するときに、陰囊に疼痛様の感じがあり、船中で陰囊に発疹を生じ痂皮を形成したものである。陰囊は全体に黄白色の痂皮をもつて包まれ、ある部分は乾燥し、ある部分は湿润しており、さながら白堊塊のごとくであると形容されている。また菌甲の形成を認め、これを取れば湿润せる発赤を認めたという。菌甲より黄癬菌を認めたというが、その詳細は記載されていない。搔痒はほとんどなく、むしろ疼痛様緊張感を訴えた。陰囊附近の大腿内側にも粟粒大の黄色膿疱様発疹が十数個あり、一部は鱗屑となり鏡検により黄癬菌を得たという。この症例は硼酸軟膏により十数日で軽快したが、さらに十数日後陰囊皮膚にうすい鱗屑様の発疹を認め、鏡検して黄癬菌を得たことである。本例は支那人が支那において罹患してから本邦に渡来したものと思われ、厳密にいえばわが国における症例ではないが非常に興味ある報告である。

青木<sup>3)</sup>、加藤<sup>4)</sup>も同じく頭部黄癬に続発せる症例を報告した（前者は項部、前腕部に菌甲を認め、後者は右下眼瞼、右頬部、右口角及び左頬部に鱗屑を形成したという）が、高橋、竹之内<sup>5)</sup>は「毳毛部黄癬の研究」と題し、北越地方の22例の患者につき詳細に報告している。これによれば患者はいずれも8~15才の学童であり、すべて頭部黄癬に合併し、原因菌は *Achorion Schönlein* であつた。氏等は毳毛部黄癬を臨床的に(1)菌甲型、(2)仮性菌甲型、(3)疱疹型、(4)落屑型の四型に分類したが、菌甲型は僅かに2例にすぎず、仮性菌甲型（麻夫大~幅針頭大の円形鱗屑）が最も多いという。発生部位は、20例が顔面であり、項部、耳朶、上肢、腹部などに稀に認めている。

その後高橋・森川<sup>7)</sup>は *Achorion gypseum* について報告し、16才女子の項部及び4才女子の頬部に発生せる症例を記載しているが、臨床的症狀は毳毛部黄癬ではなく、定型的菌甲は、一例では1個、一例では5個であり、小水疱性白癬状を示した。

また尾山<sup>6)</sup>は8才男子の左頬部に発生せる秕糠疹様落屑性红斑（菌甲認めず）より、*Achorion gypseum* を培養し、毳毛部黄癬の一例として報告した。

著者らの学会報告以後、加藤<sup>8)</sup>は11才男子の左上眼瞼の毳毛部黄癬の一例を報告し、渋谷<sup>9)</sup>も21才女子の左眼下部に発生せる一例を報告している。この二例とも菌甲を有し、家庭に猫を飼育し、原因菌は *Achorion gypseum* である。その他、占部・植松<sup>10)</sup>、原田・岸<sup>11)</sup>、下温湯<sup>12)</sup>らも本菌による白癬様の症例を報告しているが、いずれも黄癬の症状を呈していない。

これらの報告を通覧すると、*Achorion gypseum* が 毳毛部皮膚に感染した場合は、臨牀的に小水疱性斑状白癬、顔面秕糠疹、頑癬あるいは毳毛部黄癬などの、多様の症状を示すものであることを知り得るのである。著者らの症例においては、(1)臨牀的に全く定型的な菌甲を多数認める、毳毛部黄癬の病型を示したこと、(2)その発症部位が、本邦にて感染せる例としては未だその記載を見ない陰囊皮膚であること、が特長である。

一般に陰囊皮膚が、真菌にたいして抵抗が強いことはわれわれの日常経験するところであり、高木<sup>13)</sup>はこれを実験的に研究したが、本症例においてもその特殊性を示し、急速に治癒したものである。

#### 結 論

陰囊皮膚に発生した、定型的な黄癬の一例を経験し、原因菌として *Achorion gypseum* を証明した。真菌にたいする陰囊皮膚の特殊性により、本症例も極めて速かに治癒した。

#### 文 献

- 1) 岡村竜彦：皮泌誌 8 64 (明 41)
- 2) 井上成美：皮泌誌 13 523 (大 2)
- 3) Aoki, T. : Festschrift K. Dohi zu seinen 25 j Doktorjubiläum 59 (1914)
- 4) 加藤 泰：皮泌誌 19 58 (大 8)
- 5) 高橋 明・竹之内辰四郎：皮泌誌 24 217 (大 13)
- 6) 尾山常則：長崎医誌 15 2563 (昭-12)
- 7) 高橋吉定・森川高広：皮性誌 39 471 (昭 11)
- 8) 加藤安彦：皮性誌 66 233 (昭 31)
- 9) 渋谷 博：皮性誌 66 309 (昭 31)
- 10) 占部治邦・植松一男：皮と泌 19 450 (昭 32)
- 11) 原田誠一・岸 清一：皮性誌 67 490 (昭 32)
- 12) 下温湯靖夫：皮と泌 20 522 (昭 33)
- 13) 高木憲三：皮と泌 19 183 (昭 32)